

## シューベルトの「冬の旅」D911 を聴いて

白井光子(メゾソプラノ) & ハルトムート・ヘル(ピアノ)

2000年5月9日 すみだトリフォニーホールにて

全体を総括すると、1991年の録音と同傾向。この録音の時から、かなりロマンティックというより強い意志を打ち出した演奏だと思えるが、今回の演奏ではよりいっそうその傾向が強まり、先鋭化されたといつていいくらいだ。

結果として、シューベルトの冬の旅 = 暗さの中の美しさ、と考えるならばきっとかなり異質な演奏であり、耳障りに聞こえるのではないかと思いました。私自身、1991年録音のCDを何度も聞いて臨んだのですが、それでもあまりの激しさに圧倒される曲も何曲ありました。

対極的というか、昨年秋に聞いたトマス・ハンプソンとサバリッシュによる「冬の旅」は非常にロマン派的で美しかったと思います(ハンプソンの声が今を盛りのバリトンだったことも手伝っていると思われます)。ただ、このときの演奏についていえば、私には、歌手と伴奏者が同じ次元で曲を捉えていないように感じられました。すなわち、ハンプソンはまだ若く、ひたすら美しく歌おうと(いわゆるシューベルトの歌曲らしく)していたし、一方、サバリッシュの方はすごくしみじみとした(ちょっと重いとさえ感じられる)伴奏だったと思います。

さて、本題の白井 & ヘルに移ります。この二人の演奏はさすがにデュオのためのリート科なるものを創設しただけあって、二人で一体となってこの歌曲集を作り上げていることが伝わってきます。では、記憶を再現できるものについて個別に記してみましょう。

### 1. おやすみ

91年の録音で既にそうでしたが、ヘルの伴奏の出だしは、非常に強い意志を持った足取りのようなりズムで強く始まります。そして、その印象がこの曲全体、いえ、この歌曲集全体にわたって流れています。そうです。彼らの演奏では、この旅の主人公は決して女々しい男ではなく、彼女のことを忘れられないながらも、非常に強い意志をもった人なのです。暗さやあきらめの中にも力強さがあるように感じられました。

### 3. 凍った涙

この曲で一番印象に残ったのは、白井が曲の中程にある'Ei Traenen, meine Traenene'というところでほとんど地声と思える声で歌っていたことです。初めは声の衰えか、とも思いましたが、他の曲で同じくらいの音域のときにきちんと声楽的に歌っておられたのでこれは表現としての歌い方なのだろうと思うに至りました。

なお、この表現傾向は91年の頃から既にあります。

### 4. 氷結

この曲はなんといってもテンポに圧倒されました。とにかく速い。ピアノ前奏がすごいスピードで始まり、このスピードで弾ききれるのか、と心配になってしまったくらいです。白井の歌がそれに輪をかけたようにまたアップテンポで厳しいもの。配布された曲目解説(喜多尾道冬氏による)によると、この曲によりこの歌曲集「冬の旅」では氷がイメージを主導することが明らかになる、とあります。この演奏の激しさは、まさしく、その寒さ(冷たさ)の度合いが半端でないことを悟らせてくれます。

なお、91年の録音では、これほど速くはなく、普通よく聴かれる演奏と同程度の速さに感じられます。

## 5. 菩提樹

この曲は歌曲らしく聞こえました。前曲の後だけにほっと一息ついた感じがしました。

数曲聞いたところでヘルの伴奏について随分特徴があることに気付きました。91年の録音を耳にしたことのあるあなたは既に気付いておられたかもしれません、特定の音の強調がすごく激しい。私の席はちょうどピアノを弾いている手がよく見える角度だったのですが、まさしく曲の流れの中の途中の音であっても、強調するときには手首から振り落としてアタックをするという弾き方をしているので意図的であることがよくわかりました。そして、テンポの変化が非常に激しい(これは頻度というより程度です)。この音の強弱(アタック)と、テンポの変化が聴く者に著しい緊張感を与えていたことは確かだと思いました。

また、曲と曲の間の間の取り方も緊張を生み出すものでした。曲は終わったけれど流れは続いているというときははっきりとわかります。

そしてドイツ語はあまりわからない私も、知っている単語に遭遇すると白井が大変意図的に発音(例えば場合によっては話し方に近いような)をしていることが伝わってきました。これもまた緊張を持続させます。

## 11. 春の夢

これは私の最も好きな曲の中の一つです。初めの部分は春らしいとても優しい曲です。でも、その夢もすぐの鶏の声によって覚まされ、冬の旅の現実に戻されます。

白井はその流れをはっきりと歌い分けていました。鶏が鳴くとき、と歌うとき、バッハの宗教曲でエバンゲリストが鋭く間髪を入れずに入ってくるようなそんな喻えが浮かんできました。

## 13. 郵便馬車

これは前奏のリズムがとても印象的でした。手元にある音友のミニスコアでも最初の1小節は下降音型の頭にアタック記号が付いていますが、演奏ではまさしくこのくさび形の記号のように突き刺さるほど鋭利なスタッカートでした。今、ちょうど91年録音のものを聞いているのですが、録音のせいか、それほどアタックが印象に残るというほどではありません。

白井の歌ですが、91年の方が素直な歌のように聞こえます。今回の演奏では、長調による明るく軽快な歌にも関わらず、どこか自嘲的なシニカルな感じがあるように感じられました。来るはずもない手紙に心を弾ませる、この曲のメッセージがこの演奏から非常によく伝わりました。

## 15. からす

この曲は白井の歌い方で印象に残るところがありました。始まって最初の間奏後の'Kraehe'という呼びかけ、曲の終わり近くの同様の呼びかけが、また声楽から離れた歌い方をしておられたことです。これは私にとってはかなり効果的でした。即ち、非常にシニカルな感じがよく表わされていたからです。

91年録音のもののほうが普通よく聞くタイプの歌になっていると思います。

## 23. 幻の太陽

長調なのにとても重いものを感じさせる曲です。私は、プライが日本でのリサイタルで歌った最後の演奏がとても気に入っていました(残念ながら録音でしか聴いていませんが)。柔らかく包み込むプライの声が、諦念の後に来る静寂と穏やかさといったものをよく感じさせてくれたからです。

今回の白井の演奏はどうかといえば、まだ諦めきっていないと感じました。即ち、意志の

なごりが感じられました。白井はこの曲においては今までとちょっと違って、朗々と歌い上げるというスタイルを取っていましたが、まだ主人公の強い意志が残っており、穏やかさには達していない、そんな気がしました。

曲の位置づけとしてはプライのようなところかとも思うのですが、歌詞そのものからいえば必ずしもそうではないような気もします。そして、この曲をどう処理するかによって、終曲にどう持ち込むかという流れが決まるようにも思えます。

事実ヘルの後奏は終曲の前奏と完全に一体となっていました。

#### 24. 辻音楽師

この曲は最後をどう歌うのか、それをかなり意識して聞きました。

何となくメリハリが無くなってしまいがちなこの曲ですが、白井 & ヘルにおいてはこれも非常に緊張感がありました。白井の歌い方はゆっくりと、そして言葉は非常に明瞭だったと思います。ゆっくりしている分だけむしろはっきりと、主人公の存在感を表わすかのように聞こえました。そして歌詞の最後ですが、かなり力強くしっかりと歌い方でした。つまり、ひもが切れてどこかに飛んでしまうような、消え入るような歌い方ではなく、しっかりと輪郭のあるものでした。まさしく主人公の切実な問いかけのように感じられました。こうして、この歌曲集全体が始終主人公の意志の存在を主張しているかのように私には思われました。

歌の終わった後の後奏ですが、静かに、しかししっかりと、そして最後の音は音が消え入ってしまってからもなかなか鍵盤から指を離さず(ミニスコアではフェルマータになっています)、おそらく無音状態の中で観客席も最後の緊張を味わいました。

緊張の後、すぐには拍手ができませんでした。おそらく他の人も同様だったのではないかと思います。

終わった直後の感想としては、シューベルトの(美しい)歌曲を聴いたという感じが全く残っていないな、ということでした。率直なところ非常に厳しい思いに浸っていました。

そして、帰りの電車の中では何故かしきりに「どうして?」という問いかけが自分の中で繰り返されました。

娯楽として聞くにはかなり苦しいものがありました、「冬の旅」とは本来そういうものなのかもしれません。白井 & ヘルの解釈というものを考えながら反芻すると、表現したいものが非常に明確で、いい演奏会が聴けたことを喜びに思います。

追伸

ヴォルフの「ハイゼの詩によるイタリア歌曲集」を聴いて

白井光子(メゾソプラノ) & ハルトムート・ヘル(ピアノ)

+ クリストフ・プレガルディエン(テノール)

2000年5月18日 紀尾井ホールにて

ヴォルフは私にとっては全く未開拓の音楽分野ですので感想を書くにも至りません。ただ、先日鑑賞した「冬の旅」とあまりにも受けた印象が異なり、非常に楽しい気分に浸れたことをお知らせしたいなと思いました。

今回のプログラムは従来の曲順ではなく、白井 & ヘルが独自に編集した曲順によっており、全体として一つの恋物語になるように構成されています。最初と最後の曲がデュエット、間は男女のソロの対話形式のように構成されていました。

解説によると、イタリアの無名の民謡風の詩をパウル・ハイゼがドイツ語に訳したものを歌詞としているそうです。

ヴォルフの音楽というのは正直いって意識して聴いたのはこれがはじめて(昨年秋に同じく白井 & ヘルによるゲー・テの詩による歌曲集で歌われたものを除けばですが)のような気がします。音楽としてはポストロマン派といった印象ですが、非常に透明感のある音の使い方が印象的でした。このように全く予備知識もなく、配布された解説の大意訳だけを頼りに聞いたのですが非常に楽しめました。それは一つには構成によるところが大きいと思います。ストーリー性があつて非常に面白い(歌詞や音楽の中にはシリアルなものの意味深長なものもあり、面白いという表現では誤解が生ずるにも思えるのですが、これは全体の雰囲気としてと考えてください)。そして、なんといっても三人の演奏家の表現力が素晴らしいかったからに他なりません。

3人の掛け合いを聴いていると、まるで演奏会形式のオペラを見ているようでした。